



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

美術学部先端芸術表現科・ 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

Department of Intermediaart
Graduate School of Intermediaart Course

研究室探訪

第六回

Visiting the Laboratory

一九九九年(平成十一年)四月、茨城県取手市の利根川沿いの取手キャンパスに開設された美術学部先端芸術表現科。旧東京美術学校からの伝統を引き継ぐ上野キャンパスの諸学科に対して、アートの領域を横断し、インターメディアに芸術を学ぶことができる学科として認知されてきた。

今回は先端芸術表現科の開設以来教員を務める、佐藤時啓教授の研究室を訪れ、この学科ならではの演習の様子取材した。この日、佐藤研究室で行われたのはワークショップの模擬実践と、ゼミ生の作品展示に対する講評会。ゼミではこのほかに、開催中の展覧会をリサーチして、その意義やコンセプトを発表するときもあるそうだ。

ワークショップの模擬実践は、ゼミ生が個々の表現領域や技法を活かしたワークショップを開いて、教員とほかのゼミ生の批評を受けるというもの。取材当日は博士課程二年で韓国出身の李承禧^{イ・スンヒ}さんが、ヨーロッパの古典的絵画技法である「フレスコ」と「テンペラ」を素材からつくり、実際に描いてみようという内容だった。卵黄からつくられる絵具は、フレスコとテンペラの中間的なものだということだが、その光景はまるで料理教室を観ているかのよう。自分の手で作った絵具を用い、小さな額縁などに学生が描画していく様子は、児童にも楽しめそうに思えた。

「近年、美術館などの展示施設では、多くの人に足を運んでほしいとの理由から、美術家がワークショップを行う機会が増えています。作家にとっても、幅広い層に向けて自身の表現や手法を紹介することがで

きる有意義な場ですから、大学在学中から身につけてもらいたいのです」。佐藤教授がこう説明するように、先端芸術表現科ではさまざまな表現領域に関心をもつ学生が集まることから、「社会」を意識した演習が可能になる。

佐藤教授はさらに、「私自身の表現としては写真をやっているけど、もともとは彫刻科で彫刻を学んでいたということもありますし、二次元と三次元を往き来するような表現に興味をもって作品をつくっています。そんな訳ですから、私のゼミにも、油画や彫刻、あるいは工芸や書道などジャンルを問わず、今日的な芸術表現を模索し、伝統の枠組みを越えた表現を求めて学生は入ってくるのです」と言う。

研究室のガラス壁面を改造した「space 8×8」にゼミ生が作品を展示し、その内容について討議する講評会も、実践的な印



象を受けた。取材の際に展示期間中だった米重慧一郎さん(修士課程二年)は、「マチエールにこだわらず、そのとき自分が表現したいものに合わせて素材を変えていきなかった。そんな多くのスタイルに先端は合っていたのです」という。また書道の世界からゼミ生になった桐生真輔さん(博士課程五年)は、「書道の世界の閉鎖性に飽き足らず、自分の実践をアートとして高め、広がりをもたせたい」という理由から先端芸術表現専攻の大学院に進んだと説明してくれた。

先端芸術表現科は、表現者であるアーティストに限らず、プロデューサー、キュレーター、ファシリテーターや美術関係の弁護士……など、アートをとりまく様々な人材を輩出している。この学科は、現代の表現にかかわる、すべての活動領域に関心がある人に門戸が開かれているのである。



この日、佐藤時啓教授の研究室では、ワークショップの模擬実践と、ゼミ生の作品展示に対する講評会が行われた。